



特集
Close Up
2

左から看護師 前田 紗江、病院長 三嶋 理晃、看護師 村本 佳奈美、准教授 岡島 英明、特定病院助教 植村 忠広

国際医療貢献レポート

ブータンとの医療交流を開始。 診療や医学教育支援などを行っています。

京大病院では、国際的な医療貢献の一環として、ブータンとの医療交流を始めました。

2013年から2回にわたり、本院の医師と看護師を派遣。

診療活動や医学教育の支援に取り組んでいます。

医療交流協定を締結 原則は対等な相互互惠です。



病院長 三嶋 理晃

インドと中国にはさまれたブータン王国は、GNH(国民総幸福量)を大切にしたい「世界一幸福な国」とも言われています。ブータンと京都大学は半世紀以上にわたり友好関係を結び、京大は年に数回の派遣団を送ってきました。その派遣団に京大病院の職員も参加したことをきっかけに、本院は2013年10月にブータン

の保健省・ブータン医科大学との医療交流協定を締結しました。

締結に先立ちブータンを訪問した本院の三嶋 理晃 病院長は、協定の原則を「イコールパートナーシップ」だと語ります。「本院が医師や看護師を派遣して診療活動を行い、ブータンの若い医師の育成に貢献すると同時に、本院の医療スタッフが『幸せとは何か』を考える機会を得る相互互惠です」。

2013年10月には医師2名と看護師2名の第1次派遣団が、2014年1月には第2次派遣団が各々3か月にわたり活動をしました。そこで第1次派遣団に参加した腹部外科の岡島 英明 准教授、植村 忠広 特定病院助教、看護師の村本 佳奈美と前田 紗江の4人に活動の様子を聞きました。

ブータンの内情を理解した上で 医学教育の支援を進めます。

活動の拠点となったのは、ブータンの基幹病院であり、ブータン医科大学の教育病院でもあるJigme Dorji Wangchuck National Referral Hospital (JDW) 病院です。国内の外科医は6人という絶対的な医師不足、電気をはじめインフラや医療設備・器具不足の中、派遣団の4人はすぐに臨床現場のサポートに入り、3か月間で433例の外科手術を行いました。

派遣団が取り組んだのは、診療活動だけではありません。外科診療の現状を把握した上で、ブータン独自の医学教育の基盤を整備し、若い医師の育成に結びつけることです。ブータンにはまだ専門医養成の十分なプログラムがありません。



准教授 岡島 英明

岡島 准教授は言います。「海外で最先端の教育を受け、手術の経験も豊富なブータンの医師一人ひとりの能力は高いです。しかし、設備が整った先進国の医学教育だけを輸入しても機能しません。私たちができることは、内情を知った上で、どんな医学教育ができるのかを考え、アドバイスすることです」。

JDW病院の外科部長とディスカッションを重ね、今年7月から専門医研修プログラムがスタートすることになりました。植村 特定病院助教は「プログラムが始まると課題も出てくると思いますので、そのサポートも今後継続していきます」と語ります。

ブータンの看護の現状はどうでしょう。前田 看護師は「物品の不足と衛生面での不備を感じました」と言います。医師不足を補うべく看護師の仕事の守備範囲が広く、さらに事務職員がいないために看護師が書類仕事に追われるなど、スタッフの数も慢性的に不足しています。村本 看護師は「日本の看護が必ずしもマッチするとは限らないため、取り入れてもらえるものが何かを考えながらサポートし、情報共有しました」と語ります。

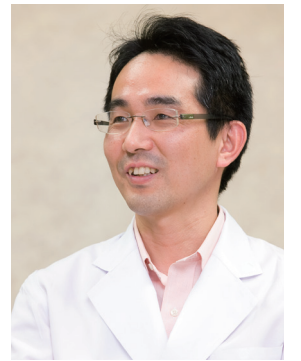
2人の看護師について、岡島 准教授は「とても大きな役割を果たしてくれた」と振り返ります。「過去の先進国の支援が根付かなかったのに比べ、今回は後に続く形ができたのは、2人の貢献があったからです。合併症などを起こさないよう、術後の管理をはじめとした病棟でのマネジメント体制を作ってくれたからこそ、手術がよい成績に結びつきました」。



看護師 前田 紗江

「次はいつ来てくれるのですか」 その期待がうれしい。

JDW病院では、医師たちがボランティアで地方に出向き、現地で手術をする「サージカルキャンプ」を行っています。その活動にも参加した植村 特定病院助教は、彼らの使命感に心を動かされたと言います。「国費で海外の医学部に行かせてもらって特殊能力を身につけてきた、だからその能力を国民のために活かしたい、貢献したいという思いがとても強いです」。



特定病院助教 植村 忠広

岡島 准教授は、派遣団への参加を「幸運でした」と語ります。「いろいろなことをリセットし、医学教育について考える機会を得るなど、良い経験になりました。愛すべき人たち、愛すべき国なので、ブータンの役に立つなら、いつでもお手伝いしたいです」。



看護師 村本 佳奈美

村本 看護師も看護の原点に立ち返る機会になったと言います。「物品がないだけに、自分の直感を信じて患者さんを見ていました。学生時代に先生から教えていただいた『看護は五感だよ』という言葉思い出しました」。

第1次派遣の後、第2次派遣にも参加した前田 看護師は、多くの気づきを得たそうです。「数の足りない看護スタッフに代わって、患者さんの家族

が患者さんや隣のベッドの患者さんを介助されていました。完全看護の日本では、私たちが全部やらなければと思ってしまいがちですが、患者さんの介助を家族におまかせすることも、患者さんにとって大切な時間だということがわかりました」。

前田 看護師は笑顔でこう言います。「ブータンの病院のスタッフから、『次はいつ来てくれるのですか』と期待してもらっています」。

本院では、今後も多様な職種による派遣団を送り継続的な支援を行うとともに、ブータンから医療スタッフを招いての研修も計画しています。

